遠い日の歌

茅葉　こうこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遠い日の歌

【Ｎコード】
Ｎ１３１４Ｏ

【作者名】
茅葉　こうこ

【あらすじ】
雨が降っていた。それもどしゃ降りの。一人ぼっちの部屋でわたしは歌を聞いた気がした。

雨が降っていた。
それもどしゃ降りの。

こういう時の一人暮らしは嫌だ。もう三年間一人で暮らしているが、こういう雨の日は特に人が恋しくなる。
二十何年生きてきた。恋しい人がいなかったわけじゃない。
べったりしてるのは好きじゃないの。なんてカッコつけて、恋人に別れを告げたのは1ヶ月も前のこと。
嫌いじゃないけど、意見の相違は仕方がない。
水が流れ落ちる窓の外を眺め、溜息を吐いた。そのまま後ろに寝転がる。
それまで読んでいた本をテーブルの上に置いた。
天上を見上げ、また溜息を吐いた。

寝転がったときにゴツンと頭に固いものがぶつかっていた。痛かったのはほんの少しで、それも最初だけだったから、気にしないでいたのだ。
手をやってみると銀色に光る携帯電話。　ぱちん、と開けてみても着信も何もあったもんじゃない。
二年以上も使っているそれを見上げて苦笑した。二年以上なんてどんな恋人とより長いじゃない。
昨今の携帯電話はどうしてああも高いのだろう。長い間使えるようにか。使わざるを得ないようにか。
私が安っぽいのはそのせいか。いや、長く続けようとしないから安っぽいのか。
ゴロゴロと雷まで鳴り始めた。
本日何度目の溜息を吐いてクッションに頭を埋めた。

歌が聞こえた気がした。歌詞はない。鼻歌に近い。
いつの間にか寝ていたみたいだ。
枕から顔を上げると、明かりに照らされた窓に反射して自分の顔が見えた。
疲れた女の顔。部屋の明かりの当たり方が悪いせいで暗い表情に見える。これは絶対明かりのせいだ。
よく見ると頬にクッションの模様が皺になっている。思わずジャージの袖で擦った。高校時代から使っているから、生地はかなり柔らかくなっていて着心地は最高だ。
不憫な女の顔は見たくなくて、寝転がったまま空を見上げる。部屋の明かりが反射するが、たまに光る雷や吹きつける大雨は見えた。

こんな雨のときはよく声を張り上げて歌った。
わたしが小さい頃。雷がなったどしゃ降りのあの日。
怖がった小さいわたしに、母親は歌を歌ってくれた。ゆっくりとした、楽しい歌。なんていう歌かはもう覚えていないけれど。
それ以来幼いわたしは雨の日には必ず歌っていた。雨の音に紛れて出した歌声。
いつから歌わなくなったんだろう。
覚えている限りのそのフレーズ。久しぶりに口に出して見たけれど、なんだか違う。
何度か口ずさんでみる。やっぱり変だ。うまくいかない。
少し考えたけれど、考えるのを止めた。

携帯を手に取る。短縮に入っている番号を、わざわざ手で打ってみた。
そういえば、この前電話したのはいつだったろう。
プルルル、と呼び出し音が鳴る。
久しぶりに歌が聞きたいと言ったら、何て言うだろう。まだまだ

子供なんだから、と呆れるだろうか。
プツ、と途切れて、懐かしい声が聞こえた。
「お母さん？あたし」

小さな穴から、あの歌が流れてきた。暖かい、懐かしい、あのメロディー。
ああそうか、お母さんじゃなかったからだ。
さっきの違和感は、もうない。
この電話をし終えたら、そのうち雨も止むだろう。久しぶりにうちに帰ろうか。

遠い日の歌が聞こえる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1314o/

遠い日の歌

2010年10月20日15時50分発行